

# 豊庄だより



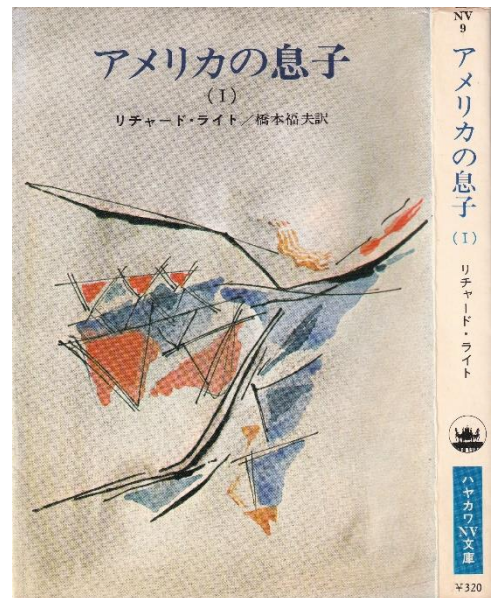
第 714 号 2022 年 6 月 27 日

福岡市早良区南庄 2-26-13  
社会福祉法人林生会豊庄保育園  
園長 西尾 達

西日本新聞朝刊に、「出会い 思い合い」という記事が連載されています。部落解放同盟中央執行委員長の組坂繁之さんが話したことを、記者が聞き取って記事にしたもので（聞き書きシリーズ）、少年時代から現在まで、組坂さんのたどった道がわかります。連載は3カ月近くにわたり、毎回、欠かさず読んでいます。その中で、彼が学生時代に読んだという黒人作家リチャード・ライトの本のことが出てきました。

組坂さんは小学5年生の時、学校の先生から他の民族についてとんでもない偏見を植え付けられたと、述べています。ちょうどこのころ、湯川秀樹が日本人初のノーベル賞を受賞。当時ノーベル賞は、ソ連、米国、欧州の白人中心でした。組坂さんは先生に、「アフリカとかミクロネシアなどの南洋の人はもらえないのですか」と質問しました。すると先生は、「アフリカとか南洋の黒人たちはあまりに暑いから普段からぼーっとしていて勉強をしない。ノーベル賞なんて、とてももらえん」と答えたそうです。組坂さんは、先生が言ったことを信じ、黒人は頭が悪いとずっと信じていたということでした。それが誤りだと気づいたのが学生時代に会ったリチャード・ライトの本との出会いだったと述べています。記事にはここまでしか書かれてなくて、ライトのどういうところに惹かれたのか、次の日の記事を待ちましたが、何も書かれていませんでした。ライトについては、日本ではあまり語られることがなく、残念でした。

実は私も組坂さんと同じ学生時代に、ライトの小説に出会い、驚くというよりとてもショックを受けました。私が読んだ本は、『アメリカの息子』（ハヤカワ文庫）でした。私より2学年上の先輩から、「西尾君、君は黒人の書いた小説、読んだことある？リチャード・ライトっていうんだけど、読んでみない？」と言われ、上、下2冊の文庫本を渡されました。ハヤカワ文庫と言えば、SFやミステリを出しているところだと思っていたので、黒人文学？どんな内容だろう？と思いながら、ページをめくりました。貧しい環境で生活している黒人少年と、そうした黒人の社会的環境を変革しなければならないと、運動をしている白人の話でした。白人が黒人に善意の手を差し伸べようとするのですが、それに対し少年は、殺人を起こしてしまいます。なぜ？そんなことをするの！と思いながら、先を読んでいきました。一気に読んでしまいましたが、その後、この文庫を友人に貸し、そのまま帰って来ませんでした。誰に貸したか思い出せません。読後の強烈な印象だけが残り、実は正確なストーリーを思い出せませんでした。もう一度読みたいとずっと思っていたのですが、文庫本は絶版となり、手に入らなくなりました。そして、長い年月が流れました。数年前のことです。福岡市内の古本屋さんで『アメリカの息子』を見つけました。値段は（当時の）定価の4倍くらいになっていましたが、ためらわず購入しました。すぐ読めばよかったのですが、そのまま本棚で眠っていました。そして、今回、組坂さんの記事に出会い、数十年ぶりに再読しようと思いました。学生時代に味わった鮮烈なものと再び出会えるかわかりませんが、ちょっとドキドキしています。



※『アメリカの息子』は、絶版になっていますが、岩波文庫から『ブラックボーイ』というライトの自伝的小説が出版されています。こちらは手に入ります。